

神奈川県の木地師

鈴木 照 男

神奈川県には、小田原及び箱根地方で製造され、一般に箱根細工と呼ばれている木地製品がある。

挽物（轆轤）技術を中心とした豆茶器・組子・木工玩具や櫓材を使用した摺漆技法による盆・茶託・茶櫃など、更に指物を主体とした木象嵌・寄木細工又は大型木製キャビネットなど種類は多岐にわたっている。これら木製品の大部分は、旧東海道の宿場と共に発展し、明治以降は箱根全山はもとより、小田原・熱海などの周辺観光地と密着し、時代の変化に対応しながらも旧来の伝統を守ってきた神奈川を代表する伝統工芸品である。丹沢山地東端の名峯大山の阿夫利神社門前町には、特産としての「独楽」が店頭に並べられ、製造の実演もされている。これらも近世からの箱根木地の流れを引いたものと思われる。

木地師は古来轆轤師と呼ばれ、古代から近世までは手挽轆轤が使用されていた。明治以降になって足踏み、更に水車から電動轆轤と進化発展したが、逆にこの頃から木地師社会は崩壊の途を歩むと云う運命をたどることとなった。

轆轤による挽物は、古くは奈良の唐古遺跡（弥生時代）から木椀・高杯が出土している。大系日本史叢書10「産業史Ⅰ」によると法隆寺に残っている百万小塔は、6年足らずで製造された記録のあることから、既に轆轤集団の存在もうかがわれる。その他紀伊麻呂の事跡などからも轆轤技術は、多くの渡来人などによる技術集団に依存していたとも考えられる。

鈴鹿山脈北西部に当たる江州愛知の地は、「愛知の良材」の記録もあり、東大寺施入の柚山として造都造寺のために多くの良材が奈良、京都

方面に搬出されていた場所でもある。更にこの地は、大陸より渡来した秦氏や百済系の人々が居を構えていた地域で、現に秦庄の町名や、名利百済寺も存在している。これらの渡来人中には轆轤を操ることを生業としていた人達も多かったであろうことは前述の通りである。この鈴鹿北西麓地方には「畑」地名が多く、この畑は秦で、ハタは古代朝鮮語の海の意とのことで、高麗からの渡来人とのみかたもできる。木地師をコマヒキとか粕屋・栢屋などと呼び、その屋号など各地に残っている。

木地師の姓に多い小椋^{おぐら}は高句麗がコクラに転化したものではないかとも伝えられている。そのため現在でも木地師には小椋・小倉・大蔵及び藤原姓が多い。

轆轤師が木地師・木地屋と呼ばれるようになったのは、中世末か近世初期で、木地生産の職人と化し、良材を求めて山を移動し、生産した



木曾漆畑の木地師

商品を換金して生活必需品購入のため行商的行為も行なわれた、これ等のグループは「あるきすじ」などとも呼ばれた。又彼等は山中に住みながら文字の心得のあるものが多く、旅渡らい

の先々で、自分の出自を誇示する必要から、職の祖神を貴種に依存し、近江を自分達の根源地として誇りをもつことの必要上から、木地師根源説が生まれた。この根源説は「職の本源説話」として、又貴種流離譚的な性格をもって拡がっていった。その内容の概略は、第55代文徳天皇の第一皇子は小野宮惟喬親王で、生母は紀氏出身の紀名虎の娘、紀静子で更衣の地位にあった。しかし第四皇子惟仁親王の生母は藤原良房の娘、藤原明子で皇后であったため、政権上の関係も

あり惟仁親王が皇太子から第56代清和天皇になられた。非運の惟喬親王は小数の側近と共に、貞観元年（856）鈴鹿山中の小椋谷筒井峠（現在の滋賀県神崎郡永源寺町蛭谷に隠棲され、この地で轆轤技術を側近の太政大臣藤原実秀などを通し土地の杜人に伝受されたことになっており、この小椋谷が木地業発祥地とされ、小野宮はその祖神と崇められるようになったと根元説話に記されている。惟喬親王は極めて聡明な方と伝えられており、前記した伝承はあくまでも



近江 木地師の根源地

木地師の職の本源を守るために捏造されたものであり、真実は比叡山麓大原の地に隠棲され、現在この地に墓陵も存在している。

さて近世初期に蛭谷の筒井八幡の神主、大岩助左エ門は、木地師の組織化を計り、全国に散在している木地師を支配下におさめ統制するため、筒井八幡を公文所と称し全国巡廻（氏子狩・氏子駆）を開始し正保4年（1647）より明治15年（1882）までに49,990人を登録している。一方同じ小野宮ゆかりの蛭谷の隣村である君が畑の金竜寺も高松御所と称し、元禄7年（1694）より明治26年（1893）までに9,734名に及ぶ木地師を登録し、それ等から氏子神役（初穂料）の代銭、又は儀式料（直衣途・烏帽子着・官途成など…）を徴集し、その代償として木地師文書（親王縁起）・天皇よりの綸旨及び当時の権力者からの免許状等の写などと称されるもの、更に宗門手形・往来手形・印鑑などを配布し、木地師としての職の特権を保証する鑑札・木札などを授与し、木地師達の職の基本を権威づけてきた。その結果蛭谷の筒井八幡宮や、君が畑の金竜寺及び太皇大明神は共に木地師根源の中心地として、現在でも関係者の参詣が盛んである。

ここで再び箱根・大山の木地師について考えねばならないが、未だ不明な点が多いので想像を交えながら述べることにする。

箱根木地師の創始については、紀州との関連や渡来人との関係が想像される。

先づ紀州との関係については、箱根木地業の発祥地と考えられている小田原市早川の紀伊神社の存在で、新編相模国風土記稿卷之三十一、村里部 足柄下郡卷十紀伊権現社の項に「本地地蔵を置、村の鎮守なり」とある。特別に木地師との関係についてはふれていないが祭神の一体である惟喬親王を敬慕する木工業者の信仰篤く、現在は木地祖神を祭る神社となっている。

ここに保存されている楠材？素地白木椀2箇（小田原市重要文化財）は大ぶりで、その一つ



小田原市早川の紀伊神社

は口径19.4cm、高さ12cm、他はやや小型で口径17.2cm、高さ9.5cmの飯椀及び汁椀で木地挽業者が祖神に奉納したものではないかと伝えられている。形態から紀州の系統を引いているとも考えられている。特に紀州の木地師については、伊勢地方との関連もうかがわれる。伊勢地方は近世初期に本来の「山渡らい」の習俗を放棄し



紀伊神社案内板

て、その地に定着した木地師が多く、伝承を採集すると、伊勢木地師の特色の一つに杓子の製作があり、その他比較的大型の「おこ」「えびら」など長い棒状のものや「くり物」製造が中心であったようだが当然椀・盆・鉢も作っていた。伊勢木地師の存在は北伊勢地方にもみられるが、特に南伊勢の度会郡柏崎付近が中心だったと思われる。ここは木地師根源地（近江の小椋谷）

から鈴鹿山系・布引山地を通過し南下定着したもので、現在三重県紀勢町崎にも惟喬親王を祭る立派な太皇神社があることでも来歴の一部を推測することができる。一方、小田原市早川の紀伊神社の木椀の特色や、更に箱根山頂の箱根宿（元和4年に三嶋宿と小田原宿からの移住民により形成された新駅で、現在も小田原町及び三嶋町の町名が残っている。）この新駅成立以前、この付近は蘆川と呼ばれ、箱根権現の門前町として山杓子を細工し、坊中に納入しており一名杓子町とも云はれていた。この杓子は坊中より壇家への配札に添えて贈られたと伝えられている（新編相模国風土記卷27、村里部足柄下郡巻之六）この点からも伊勢木地師との関係もうかがわれる。しかし轆轤木地師と杓子木地師では用材利用法に相違があり、例えば箱根細工の場合、指物・寄木細工などは杓子木地の用材利用形態と一脈通ずるものがある。

更に、箱根木地業の創業期と思われる中世末期に、この西湖の宰領であった北条早雲は伊勢国人で、伊勢新九郎を名乗っており、紀勢・伊勢の木地師との深い誼のあったことも想像できる。中野敬次郎氏によると、明応4年（1495）、早雲が小田原城をおとし、大森氏の所領を支配するに至ると、領内の民心安定に意を用い軍事上の目的と、生活必需品の生産・自給のため、石工・大工・鋳物師・染工等の諸職人を掌握・保護を加えて安堵定住を計っている。これは早雲のみならず氏綱・氏康・氏政・氏直の5代1世紀に涉って続けられている。このことから特に伊勢木地師との深い関係のあったことを示唆している。又箱根山内の旧村には木地業を行っていた村が多く特に須雲川・畑宿・底倉・大平台などでは、正月に松を立てず櫓しきみを立てる点など伊勢木地師と一脈通ずるところがある。

ところで早川紀伊神社に伝承されている親王縁起は前記した根源地のものとの相違点が多く、惟喬親王は伊豆に流罪になる途中海荒のため国府津に漂着され、その後早川にて病没されたと

紀伊神社由緒書に述べられている。又御子が親王を尋ねて来られたが、真鶴町岩で2才で亡くなられ、ここに現在岩の鎮守としての兒子こ神社があり、参詣者も多い。しかし新編相模国風土記稿の兒子明神社の項には「村の鎮守なり……土肥次郎実平の外孫萬寿冠者の霊を祀る、神体木造なり……」とあり惟喬親王関連事項は見当たらないが、現在は前述した如く親王の御子神を祭ったとする由緒が社前の碑文に認められ、ここにも根源地の縁起との異質性を現わしている。

一方相模湾東岸には紀伊神社をはじめ、キノミヤ（木ノ宮・来宮・貴ノ宮）など樹木に関連した社名や、海からの貴人・技人の到来を意味すると思われる神社があり、祭神も五十猛命など植林に関連した神が祭られている場合が多く、それらの神社はすべてクスノキ・アラガシを中心に鬱蒼たる社叢の中に鎮座している。これらの大木は神の漂着時の目標になった「招代」が神木化され、更に樹霊信仰とも結合しキノミヤの社号が生まれたのであろう。場合によっては渡来人との関係も多分に考えられる。大磯町では七月中旬に町を挙げて盛大に実施される鎮守の高来神社（旧高麗神社）の祭礼で木遣唄に「権現丸」「観音様」がある、共に高麗国から渡来の神（若光）の来郷を寿ぎ祝ったもので、この



真鶴町岩の兒子神社

地方は高麗からの渡来人の古代東国に於ける一拠点でもあった地で、現在の高来神社の所在地も、大磯町高麗である。近くの平塚市西端にも唐ヶ原の地名も存在している。

これらの地域に残されている伝承の中には箱根権現と結合しているものや、又熱海市の伊豆山神社に残る「走湯山縁起」などとも関連している。伊豆山神社の縁起は、熱海郷の地主神として信仰されている来宮神社の縁起とも一脈通じており、共に大磯の渡来神（若光）と深く結合している。以上の結果からも、早川紀伊神社の縁起の異質性や、木地師根源地の蛭谷・君ヶ畑が実施した箱根山内の氏子狩に対しての山内木地師の消極的対応などの点を総合してみると、箱根木地師は近江根源地と直接関係のない別系統の木地師で、渡来系の技人と近江根源地の伝承が融合され現在に至ったものではないかと推測できる。



熱海来宮神社

大山木地師についてもふれておこう。大山木地師は本来大山寺土産として大杓子造りをしており、箱根木地師の一派が移住定着したと思われる。嘉永2年（1849）8月には筒井系の氏子狩に応じており、金子屋・播磨屋及びその弟子の小椋亀太郎・中村屋・岩田屋の合計26名の名がみえている。又明治15年大山町職人数（陸軍測量軍用偵察二付上申書大山町）によると、大

工・木挽・指物師・裁縫工・桶工・屋根師・左官・石工などの職人が合計27名記録されており、挽物職を兼ねている者が13戸、そのうち9戸が玩物商として店を構えコマ（独楽）や杓子を参詣者に販売していた。現在大山の木地挽は鈴木、播磨屋、金子の三家のみとなっている。大山には「こまや旅館」もある。こま屋は狗屋、狛屋、



大山こま（金子屋の作業場）

高麗屋に通じ、特に独楽屋とのゆかりの深い家とも考えられ、前職からの繋は忘れられていると思うが、木地師との関連の深いものではなかろうか。



大山「こま屋」旅館

小田原の早川、箱根及び大山の木地師の成立及び現状の一端を記してきたが種々疑問点や不明点が多く今後の調査をまたねばならないが、とにかく箱根及び周辺の木地細工は、紀伊神社

を祖神とした早川本地師との関係を見無視することはできないであろう。